

小金井の力石と古代ギリシアの「力石」

水谷 智洋

日差しのおだやかな晩秋のある日、思い立って、JR 中央線武蔵小金井駅の約 1km 南にある「はけの道」の散策に出かけました。「はけ」とは、小学館の『日本国語大辞典』（第 1 版、1975）によれば、「北海道・東北・関東から西の方にかけて、丘陵山地の片岸をいう地形名」とありますが、小金井市では、この段丘崖（専門的には「国分寺崖線」と呼ばれているようです）の下を約 2km 東西に走る細道を「はけの道」と名付けて、数少ない市内名所のひとつとして喧伝しているのです。り たしかに、急坂を数分下るだけで、崖下のもすごい交通量の都道 134 号線（通称「連雀通り」）とはまったく別世界のような、鄙びた風景が広がるこの細道は、文句のつけようのない素敵な散歩道なのですが、なにぶんにも、我が家は市の北端にあり、めったにそちらに向かうことはないのです。そういう訳で、久しぶりに、どこか鎌倉の谷（やつ）を思わせるこの地の景観を楽しんでブラブラ歩きをしていた私は、「はけの道」のすぐ南の小金井神社に足を踏み入れたとき、その境内でひとつの「発見」をしたのでした。

それは、社務所前の石灯籠の横に（まわりをコンクリートの枠で囲み、白玉石の中に）置かれた 2 つの楕円形の石で、左側の長さが 70 cm 程の石には、次のような刻文が読みとれました。（もうひとつの、やや小ぶりの石にも刻文があったことは確かですが、磨滅していました。）

奉天保九年四月吉日

六拾五貫目余

前原長五郎

私はすぐ、これは力石（ちからいし）だな、と察しましたが、念のため、社務所でおみくじを売っていた男性に訊ねて、それを確認しました。しかし、その

男性もくわしくは知らないとのことでしたから、帰りに市立図書館本館があるのを幸い、立ち寄って郷土誌コーナーをのぞきました。そして芳須緑（よしず・みどり 1908-95）『続小金井風土記』（小金井新聞社、1986、278頁）に、これらの力石に言及した次の記事を見つけました。

言い伝えによると、前原に住む長五郎とその弟が、国立の谷保天神へ行った際、地元の若者と力くらべをした“神石”だそうで、見事勝利をおさめた兄弟が、この六十五貫（約244kg）ともう一つの石をそれぞれかついで、何と六*の道のりを運び、奉納したものだそうだ。²⁾

さて、二個の力石を実見した私は、これらをついで6km運んだ云々はまゆつばだとしても、こんな重いものをよく持ち上げたものだと思直に感嘆する一方で、ギリシアに残るこの種の大石のことに言及した雑誌論文と、ブルータルコス「テーセウス伝」中の一挿話を思い出しました。まず前者ですが、N.B. Crowther, *Weightlifting in Antiquity: Achievement and Training, Greece & Rome, second series* 24 (1977), pp.111-20がそれです。よく知られた雑誌ですが、いささか古いのでこの論文のことを御存知ない方も少なくないかもしれません。なにかのご参考までに、そこに引かれている大石のうち、現存する、誰某が持ち上げたとの刻文があるという2条件を満たす2例をご紹介します。3)

そのひとつはThera島で発見された前6世紀の黒い火山岩で、周約2m、重さ480kg、hexameterと覚しき次の刻文があります。

Εὐμάστας με ἄηρεν ἀπὸ χθονὸς ἡο Κριτοβόλο(υ).

(IG 12.3.449)

クリトボーロスの子なるエウマスターズぞ、われを大地より持ち上げたり。

エウマスターズがその大石をどの高さまで持ち上げたかは不明ですが、地面から数cm持ち上げたか、あるいは単に（前後左右にでしょうか）動かした程度ではなかったか、とCrowtherは推測しています。480kgという重量を考えると、それだけでも大変な力業です。

もうひとつはOlympia近くで発見された、同じく前6世紀の砂岩塊で、大きさ33×68×39cm、重量約143kg、刻文は次の通りです。

Βύβων τήτέρει χερὶ ὑπερκέφαλά μ' ὑπερεβάλετο ὁ Φόβλια.

(*Inscr. Ol.* 5.717, *Syll.* 3.1071)

ポラースの子ビュボーンが片手で私を頭越しに投げた。(大意) 4)

ここには「持ち上げた」という語はありませんが、ビュボーンは、「片手で頭越しに投げ」る前に、両手でその石を持ち上げたに決まっています。そこで、両手で肩のあたりまで持ち上げた約 143 kg の岩石を、「片手で頭越しに投げ」ることなど不可能だという論者に対して、Crowther は 'perfectly possible' と断ずるのです。なお、彼は 2 つの刻文の関係について、'whose (= of the stone of Eumastas) inscription is generally believed to be derived from this (= the inscription on the stone of Bybon)' と記述していますが、あるいは、前者がなにかぎこちない感じのする後者を下敷きにし、そこに改良を加えてつくられた hexameter と考えられるから、というのがその理由でしょうか。この観測が当たっているかはさておき、2 つの刻文が、散文にせよ、韻文にせよ、「誰某が私を持ち上げた」という表現形式を取っている点が、「誰某が私をつくった」、「私は誰某の所有物」などという、物を第 1 人称とする古代ギリシアの多くの銘文と通底する特徴であると言えましょう。ついでながら、私はわが国の力石の刻文については、上記の一点しか知りませんので、ギリシア風のそれが日本のどこかに存在しているのか、是非知りたいと願っています。

次にテーセウス伝説中の一齣ですが、プルータルコスによれば、アイゲウスがトロイゼーン王ピッテウスの娘アイトラーと契りを交わしたあと、その地を去るとき、彼は大石の下に剣とサンダルを隠しておきました。そしてアイトラーに、もし息子が生まれたなら、その子が一人前に成長したとき、その大石を持ち上げて二品を取り出し、それらをたずさえてアテーナイへ向かわせるように、と命じておきました(第 3 節)。その後、生まれた息子テーセウスがたくましい若者となったとき、彼はらくらく大石を持ち上げ、その下にあった品物とともに父王の待つアテーナイへ旅立った(第 6 節)というのです。

と、そのように — むろん、剣とサンダルなどという細部は別にして、大筋はそのようだったと — 私は記憶していて、この話に登場する大石こそ、「持ち上げることが 人前の資格として評定されることも多かった(『大百科事典』、平凡社、第 9 巻、1985、594 頁、平山和彦氏執筆の「力石」の項)」というわが国の力石のギリシア版に他ならないと独り決めしていたのですが、いま改めてテキストにあたってみますと、多少気になることが出てきました。それは、ア

イゲウスのアイトラーへの指示では、息子に将来「大石」πέτρα μεγάλη (3.4) を「持ち上げる」ἀναστήσαι (3.5) 力がついたら、と語られているのに対して、テーセウスがそれを実行する段になると、ὁ δὲ τὴν μὲν πέτραν ὑπέδω καὶ ῥαδίως ἀνέωσε (6.3) とあって、どうやら「持ち上げた」というより、「脇に押しつけた」のではないかと思われる点です。⁹⁾ もともと、剣とサンダルとは、テーセウスが将来アテナイのアイゲウスを訪うときに、二人の親子関係を証明する「父親のしるし」τὰ πατρῶα σύμβολα (6.2) として息子に持参させるための品でしたから、それらが大石の下に隠されたことも秘密なら、いつの日か、それらをテーセウスが取り出すことになろうときも、その行為を決して他人に知られるな、とアイゲウスはアイトラーに厳命しておいたのです。とすれば、テーセウスは、アイトラーに連れて行かれて事の次第を打ち明けられたその場所で、大石を「脇に押しつけた」で二品を取り出しさえすればよかったことになりましょう。とはいえ、たとえ「持ち上げ」はしなかったにせよ、テーセウスはその大石と四つに組んで、自らが立派に一人前の男になったことを実証した訳ですから、その大石は、やはりギリシア版の力石と考えておきたい気持ちが強くなっています。

注

- 1) 小金井の「はげ」を舞台にした文学作品として大岡昇平『武蔵野夫人』(1950) がありますが、いまでは「有名な」とは言い難いでしょう。
- 2) 「前原」(まえはら)は小金井市南西部の地名。「国立」(くにたち)は、小金井市の西隣の国分寺市の南に位置する市名。また「谷保」は、「やぼ」と読みたくなるかもしれませんが、「やほ」。ちなみに『角川 日本地名大辞典 13 東京都』(1979, 1043 頁)に、「現在も使われる俗語の「やぼてん」は、一説にこの谷保天満宮の神像から出たという」とあります。なお、天保九年は西暦 1838 年。
- 3) 本文中の 2 個の大石は Crowther 論文の pp.111-2 に記述されています。なお、同論文の — 少なくとも前半の — 趣旨は、そうした大石の持ち上げという feasibility に懐疑的な E.N.Gardiner, *JHS* 27 (1907), H.A.Harris, *Sport in Greece and Rome*, London, 1972 等の見解を反駁して、それが充分可能であったと主張することにあります。しかし、私にはその論争に加わる資格がありま

せん。

4) τῆτέρειについては、Phoenix 5.2 τῆτέρη (J.U.Powell (ed.), *Collectanea Alexandrina*, Oxford, 1925, p.239) を手がかりに、アッティカ方言の τῆ ἑτέρῳ と解しておきますが、τῆτέρει χειρὶ で何を言いたいのでしょうか。もともと、この text は ‘problematic’ だそうですから、別の解釈の余地があるのかもしれませんが。また、ὑπερκέφαλα について Crowther は、‘over his head, above his head, or head-height’ と 3 通りの投げ方を示唆しています。しかし私はその違いがよく分からぬまま、単純に「頭越しに」としておきました。

5) 一般に流布している邦訳では、「岩の下に身を入れて安々と持ち上げた」(河野與一訳『プルターク英雄伝(一)』(岩波文庫)、1952)「石の下に肩を入れて安々と持ち上げた」(太田秀通訳(村川堅太郎編『世界古典文学全集 23 プルタルコス』、筑摩書房、1966 所収))と、いずれも「持ち上げ」説です。

[追記] エウマスタースとビュボーンの大石については、ごく最近の T.Perrottet, *The Naked Olympics*, Random House Paperback Original, New York, 2004, p.87 にも簡単な記述があり、後者の刻文を ‘Bybon son of Pholos tossed this over his head with one head’ と訳しています。これは、無論、別の校訂に依っているものに相違ありません。このことを私にご教示下さった東大教養学部 Sandra K.Lucore 助教授に、厚くお礼を申し上げます。